

週刊 R O 通信

2 0 0 0 年

奥井 禮喜



有限会社ライフビジョン

週刊R.O.通信 2000年 目次

貴闘力に敬服という声に共感	6
教育改革国民会議への注文	10
中途半端やなあ	14
モノが元気を喪失させる	18
民主党は未来志向の戦略・政策打ち出せ	22
大津市長選挙の行方	26
市民が意志表示を開始したぞ	30
焼酎・象徴・選挙と美学	34
地方分権ということ	38
残り二日だ、がんばれ八幡！	42
大津に市民の風が吹いた	46
一市民として衆議院議員選挙に関わる	50

気になつたコメント	54
もうちよつと本気になれぬか	58
絶対安定なんて思つてもらつちや困る	62
学びのシンジケート	66
大学改革の方向性	70
さわやかな風を少々	74
金の話は切ない	78
情緒的文脈の問題点	82
読書について	86
夏・休みの思い出	90
匠に寄せる思い	94
言葉の重み・言葉の意味	98
釣り師観察・キヤプテン号同乗記	102
自由時間の考察	108
人事管理理念こそが問われている	112

巨大運動会はどいへ行く	116
粹が感じられない改革論	120
絶叫止めろアナウンサー	124
いささか軽過ぎやしないか	128
いささか調子良過ぎはしないか	132
パロディ国会の行方はどうなる	136
水滸伝?	140
年齢についての一考	144
人気がない	148
賭博奨励演説会	152
一步後退二歩前進!?	156
ホテル・バー・カウンターにて	160
三浦カズこそ勤め人の美学	164
どうしても鉋屑的重量内閣	168
恐るべし米国民主主義	172

リスクがあるからリスクが賭けられない	176
豊かさに耐えられるか	180
成人式騒動のおまけ「啓蒙とは何か」	184
雪の日や雪のせりふを口ずやむ	188
大使は尊敬すべきスペイである	192
今まで、政党政治の没落か	196
政党株式会社論	200
人材払底時代の総理大臣 「だやい」んじやないかね	204
朝鮮三・一運動を知っていますか	208
予告つき退陣の無風流	212
日本の文化としての消費	216
悲憤の庶民小説・水滸伝	220
あとがき	224

貴闘力に敬服という声に共感

幕じりで高齢・初優勝した貴闘力は昨今、元気のない中高年勤め人には一服の清涼剤となつたらしい。朝日新聞『声』欄に次のような投書が出た。

——背水の陣を敷いて一三日、一四日と横綱を相手に必死に組みついていつた姿は、執念が痛いほどに感じられた。そして千秋楽、最後の力を振り絞つて土俵ぎりぎりのところでも、あきらめずに心、技、体のバランスを駆使して頑張った姿は忘れることができない。

そこで数年前の今ごろのことが思い出された。私はある鉄鋼会社に勤務していたが、バブル崩壊後、経営立てなおしに日本長期信用銀行から、乗り込んできた役員たちが、中高年層の社員を集めては、コンサルタント会社を使つて、心身の衰えを指摘させて、次のように言つていた。世の中は終身雇用の時代が去り、能力主義になる。並みの中高年者は、退職金を余分に払うから早く辞めて、次の職場を求めたほうがよい、と。その時、私は立ち向かう気力が失せていたので、恥かしながら早期退職に応じざるを

得なかつた。貴闘力には敬服するばかりだ——（3/30）

六一歳会社員とあるので、後に再就職されたらしい。なんだか、ほろりとさせられる文章ではないか。

私は以前いた三一菱電機で、一九七二年から中高年対策に関わってきた。電機は女性が多かつたこともあって、当時はまだ平均年齢も三〇歳前後の所が多く、大部分の会社では、中高年よりも若年層対策に関心が強かつた。若年層は若年層で、年功序列のシステムに少なからぬ不満があり、ベア交渉では、一律ではなく定額要求に重点を移せとか、もつと若手を登用せよという気風であつた。

中高年層の方々は、戦争でなんとか生き残り、あるいは戦後の焼け野原から、混乱と貧乏を克服してきたのであり、会社の発展こそが、自分と家族の安寧につながると考えて、一途に尽くしてきた。一九七三年に四〇歳以上の中高年全員、ざつと八、〇〇〇人を対象とした意識調査結果を発表したが、そのサブタイトルは「つましく、けなげな中高年像」とつけられた。

以来、四半世紀、私は中高年問題・高齢化問題を一貫して考え、取り組み続けてきたのであるけれど、とりわけ「中高年・高齢化は誰も避けて通れない」課題であり、「Aging

(加齢)」のもつ意味を、もつとダイナミックに、すべての人々の共通する課題として、取り組む必要性を痛感している。

たとえば不況になれば、真っ先に槍玉に上がるのは、常に中高年層の方々であった。中高年層は仕事の割合にたくさん給料をもらっているという批判が常に醸成される。しかし、本当にそうだろうか。とくに昔に遡れば、遡るほど、彼らは低い労働条件に甘んじてきた。彼らの善戦敢闘なくして、今日のわが国の繁栄はないのである。

若くてピチピチしている時期は誰にもある。そして中高年、高齢時代もまた誰にもある。生産性と効率を大事にしていくことはいいが、人間を使い捨てライターのごとくに考えてしまつたのでは、なんのための経済であるか。経済は人間が快適に人生を過ごさんがためにこそ存在意義がある。

多額の生命保険をかけて、人の命を奪わんとするような不埒な考え方を支持する人はいないだろう。しかし、中高年・高齢者に対する企業社会の思想傾向を煎じ詰めてみれば、錢ゲバの貸し金業者と極めてよく似た構図が見えてこないであろうか。

私は最近、勤めの方々に直接取材する機会に恵まれている。取材しつつ、連日、パソコンに皆様の発言を記録していくのは、くたくたになるほどの肉体労働であるけれど、

そこで開陳される意見を聞いてみると、組織の中では、いかにものびやかさが消えてしまつて、権威・権力的な志向性が高まつてゐるよう見えて仕方がない。

成果主義だの、能力主義だのを標榜するのも結構だが、どんなに優秀なお方であつても、一人で生きていかれるわけではない。助け合い、協働する喜びを復活させなければ、本当にバブルを克服したいにはならないのじやないか。他人を思いやれない優等生にだけはなりたくない。

2000.4.3 (月)

教育改革国民会議への注文

小渕さんの積み残しというか、教育改革国民会議は、予定通り一年後の報告をめざして出発するらしい。小渕さんは「戦後教育の総点検」「一三万人におよぶ不登校」をとくに強調したと報じられた。

引き継いだ森首相の初心表明演説では、教育に関する部分を読むと、「学力だけが優れた人間ではあかん。創造性のある『立派な人間』をめざす」と主張されていた。揚げ足どるのではないが、「立派な人間」とは、少なくとも創造性があるだけではない。「学力だけが優れた人間ではあかん」という部分は賛成だけれどね。

私はただいま、ある組織の依頼をうけて、一〇〇の方々に一人一時間、一〇〇人一〇〇時間のインタビューを連日展開中だ。インタビューしつつ、パソコンにがんがん、ご意見をぶち込んでるので、目はしょぼつくは、肩はパンパン、寝ていても昼間と同じ夢を見るってな具合で、寄る年波とて！疲労も高原状態。おまけに花粉症が酷く、鼻の辺りがひりひりする。

しかし、とにかくおもしろい。人さまのご意見を拝聴するのは、まつことたのしいの
であります。

感動の第一は、実に皆様が、毎日、地道な仕事を通して、国民生活に大きな貢献をしてくださっていること。彼らの仕事は決して派手なものではなく、目立つものではなく、にもかかわらず、万一事故・失敗ありせば、寄つてたかつてばろくそ言われる類の仕事である。

まともに機能して当然、まともに働いていても、まず、感謝などされることは少ない。彼らは、屈託なく、着実に、われわれの社会を支えてくれている。創造性という面から考えれば、さしてオリジナリティを發揮するような仕事にあらず。しかし、社会を支える立派な仕事である。立派な仕事をしている「立派な人間」とたくさん出会つたぞ。私たちが社会人となつた三〇数年前は「勤労第一」であつた。何がなんでも仕事が大事なのであつて、余暇や家庭に現を抜かすようでは、一丁前と見てもらえなかつた。

昨今、えらい方々は「よき会社員である前に、よき社会人、よき家庭人たれ」とおっしゃる。しかし、よき社会人にせよ、よき家庭人にせよ、これまた、まつこと難しい。くたくたに疲れて帰宅しても、子供と遊べば元気が出る人がいる。私など、疲れてい

なくても子供と遊ぶのは疲れる。子供と遊んで元気の出る人は「立派な人間」である。「仕事だけじやあかん、よい趣味を持て」と言われる。さよう、仕事をこなし、余暇に、他人様に抜きん出た芸をお持ちの方は、やはり「立派な人間」である。

「創造性が大事だ」などと呴えられると、それはまあその通りだろうから、いちやもんつけにくい。だから、もちろん私も「創造性が大事じやない」などと言いたいのではない。

日本人として初のノーベル物理学賞を獲得された湯川秀樹博士は、かつて「創造性というものは勉強せずして生まれるものではない。だからおおいに勉強しなければならない。しかし勉強すると、人はどうしても偏見の塊になりやすい。だから創造性ある人間とは、一方で偏見の塊になりながら、偏見の塊から飛び出せる人なのです」とおつしやった。まつこと難しい。

話を戻すが、今、私がインタビューしている方は、ひとつ社会システムといつていい機能を現業で支えている。その上に、君臨なさっている方は、間違いなく学力をウエポンとしてのし上がつた方々である。いわゆる「キャリア」と言われる方々である。現業における圧倒的多数のノンキャリアの方々が「立派な人間」であることはすでに

述べた。まさか圧倒的多数の「立派な人間」の上に君臨なやつのキャリアの方々が「非立派な人間」であるなどいふことはなかへい。もし努力をもつてキャリアたる「立派な人間」の方々がそうでないとするならば、問題の本質は、果たして教育にあるのだろうか。

そこで教育改革国民会議委員の皆様にお願いしたいことは、官僚の作文でなく、まつりの委員の皆様が自分で報告書を書いていただきたいのである。

2000.4.10 (月)

中途半端やなあ

上方漫才大賞に「ちやらんぼらん」が選ばれた。決め手のギャグは「中途半端やなあ」と言うのだそうだ。実は私はまだこの漫才を聞いたことがないので、その面白さの雰囲気が分からぬのだけれど、字面からうける印象だけでも時代を切つていることが感じられる。

関西のよさというのは、もともと中途半端な、ほんわかとした雰囲気をもつのであって、たとえば街で知り合いに会つたとき。「こんなちは、いやあ、ひさしごりやねえ」「ほんまに、おひさしごり」「どちらまで」「ちょうどそこまで」「そうでつか、ほな、さいなら」。これで万事片付く。

商売人同士であれば、「儲かりまつか」「まあまあでんな」「そら、よおました」「ほな、また」。この辺りの呼吸、まつこと具合がいい。

「儲かりまつか」と問われて「いや、あかん」と答えてしまえば、後が続かない。そもそも聞くほうは、相手が儲かつていないと答えた場合に、なんとか助けてやろうと考

えているわけではない。逆に「うはうはですわ」なんて答えたりした日には、声かけたほうが儲かつていなかつたりして、「あの糞がき」ってな怨恨の原因になつてしまふかもしれない。

中途半端にして、いい加減な関係というものは、実は案外な人間関係の潤滑油を果たしているわけだ。「じゅんさい」という睡蓮科の多年性植物があって、食用なのだけれど、ぬるぬるして、味があるようでない。「じゅんさいな奴」と言えば、とらえどころのない、訳の分からぬ奴という意味である。と、大阪の先輩・田中豊氏が教えてくださつた。

「あなた年収いくらくらいですか」「え、年収ですか、えーと手取りが」「いやいや、手取りじやありません、額面、総額ですよ」「最近、給料明細書見たことないしねえ」「それじや、もらっている給与と仕事は釣り合っていますか」「まあ、そこそこ。こんなもんでしょ」

右肩上がりの時代が終つたという社会的恫喝の登場以来、人々は不安におののきつつ、財布の紐を堅く締め続けていることになつてゐるけれど、その割合には、けちけちちまちまと日々お金の勘定していらつしやる様子でもない。これまた、中途半端な気分とい

う感じがしないでもない。

ホテル・バーにて。「何になさいますか」「水割り」「はい、分かりました」とて、客の前には水割りが届く。客は黙つて飲む。いつも不思議な光景である。水割りと言つても、これという定式があるわけじやない。七対三もあれば、五分五分もあり、はたまた六対四もあるうじやないか。頼むほうもまったく意を払わず、頼まれたほうも気にしない。ただなんとなく。

「農水省Q & A」なる、接待マニュアルができたらしい。厚さ一・五cmもあるものだと報道された。贈賄、収賄、容易にはなくならず。さりとてそんな膨大にマニュアルを作らなければならないほどの問題か。これを評価する官僚の感想によれば「ここまで細かく指導してあれば、安心だ」と言う。

いわば箸の上げ下げまで規定しなければ仕事が普通にできないという、エリートなんて、いつたい何なんだろうか。まさか、マニュアルがなかつたから、贈収賄、過剰接待が発生したとは言うまいか。あほか。

慎太郎都知事が、外形標準課税以来、お調子に乗つて「三国人発言」をおやりになつた。彼は太陽族とて格好いいけれど、もともと思想的には赤狩りのマッカーシーと変わ

らない、「ど右YOKU」である。ほつちやんっぽい人がかわいいのは、本来、他者に思想的迫害を加えぬタイプだからである。わが慎太郎ちゃんは、少々、その点、問題なしとしない。しかし、彼の発言は決定的に直裁的、かつ中途半端じやない。

慎太郎都知事は自分を表現するに正直かつ、率直。その点、私は好きな思想タイプではないけれど、評価しますよ。しかし、こいついうタイプの政治家に対して、「どちらまで」「ちよつともや」「ほな、さいなら」ってな中途半端な対応は危険である。

政治家たる方々、流言蜚語的なコピーをお使いになるのは、やはりよろしくありません。そして、そのようなお調子になられる方は、本質的に「国際的田舎つく」だということを、私たち庶民は認識しておかないといけないのじやないかな。中途半端ってのは案外、意味のあることかわしちゃせんぞ。

2000.4.17 (月)

モノが元気を喪失させる

IT革命が日本経済を再生させる。と言われると、はあそりかいなど思うのだけれど、たとえばネット取引が繁盛することは、従来の店舗販売が移転するのであるし、携帯電話の隆盛は固定電話から移転するのであるし、輝けるIT革命が経済再生の全知全能、万能薬というわけにはいかないと思う。

政治に経済再生の責任を追つ被せれば、ヒビのつまりは、なんでもかんでも公共投資というわけで、公共投資などに気前よく注ぎ込んだ結果はGDPを上回る借金を国が抱え込んだ。

リストラしなけりや会社にあらずの風潮は一時凌ぎにはなつても長期的な体质強化にはつながるまい。とくに中高年以上の働き口を締め上げてしまつて、必然、今は六〇歳以上の方々はなんとかやれるから引退なさるが、やや長期的に考えれば労働力人口の減少は必至、年金も六五歳からの支給となる。

とすれば確実に六五歳までは働いていたので、社会的な負担を軽減するようなシス

テムにしておかないと、結局は現役世代の負担が重たくなるばかりである。他人の仕事を奪うことは他人を養うリスクを負うことだ。

退職金なんか払えなくなるかもしけぬと企業人事担当者は吼えておられるけれど、退職金が老後生活の基盤をなすのは当然だから、退職金を減らしたい分、働く期間を延ばすという策なかりせば、人々は何によつて老後生活を維持するのであろうか。人事部の視野狭窄には困つたものだ。

今のままでは介護保険は負担増あつて、安心老後の獲得というわけにはいかぬ。高齢化コミュニティを確立しようとせず、金で老後の安心を買おうとしたところに、相変わらずバブル時代の後遺症を見る。

個人消費が盛り上がらぬのは将来不安と、所得が増えぬゆえだというのは、その通りであろうけれど、個人金融資産一、三〇〇兆円あり、豊かな国の代表の一つでありながら不安を抱えて愚痴をこぼすというのであるから、将来不安が解消せぬ限り、消費は増えないという理屈になる。その将来不安はお金が回らぬゆえ増幅され続けるという接配。金の因果律にどっぷりはまつている。

少しお金を離れて考えてみようじやありませんか。

消費を大きくとらえれば、生きていること 자체が人生の消費。消費が活性化しないのは人生の元氣がないことに通ずる。とすれば、ここが大事なことなんだけれど、お金がないから元氣が出ないのじやなくて、元氣がないから人生という消費が活性化していない。

たとえば耐久消費財ブーム時には、日本全国おおいに元氣であった。耐久消費財というモノを買うためにやりくり奮発した。モノを買うのだけれど、モノの所有が目的だったのではなくて、モノを使って得られる暮らししが目的であつた。

モノには所有の側面と使用の側面がある。所有するだけなら部屋が狭くなるだけだけれど、使用することによって暮らしが変貌する。耐久消費財ブームとは暮らしの変貌変革。経済活性化の本質は、新たに、あらまほしき暮らしを手にせんとする元氣にこそあつた。

ところで昨今、喉から手が出るほど欲しいモノはない。洋服タンスには袖を通さぬ洋服が満タンになつていて。モノを購入するのは、それを活用していい気分になり、元氣培養に資するのが目的だけれど、所有しただけで活用しないものだから、結局は財布の中身が減つただけ。財布が軽くなつた分、元氣喪失するというパターン。これ、貧乏人

の悪循環という。

消費の重大側面は単にお金を使うことではなく、時間である。有意義な時間を過ごし
た後のリツチな気分。お金をたくさん投入したとて気分がよくなるとは限らない。金が
ないから元気が出ないのでなくして、元気がないから、浪費（気分）につながつてしま
うのだ。

貯蓄は将来のためにするのだけれど、（今使わない）我慢のコストと将来の消費の効
用がバランスしているのである。不安を目的とすればたぶん溜めても溜めても均衡して
不安が拡大するだけである。

この点、借金王を自負した小渕さん、貯蓄などせず消費に励む米国人のベンチャービ
ジネスたるやたいしたものではあるまいか。そう、わが国経済再生のキーは「暮らしを変え
たい」という自分の心の中にこそありなのだ。

2000.4.24 (月)

民主党は未来志向の戦略・政策打ち出せ

民主党が年収四〇〇万円～八〇〇万円の中間層にターゲットを絞った減税対策を検討しているという。政策も商品と同じであるから、国民一般という漠然とした相手に対する戦略よりも、セグメント戦略のほうが効果を發揮する可能性はある。その発想が誤っているとは思わないが。

年収四〇〇～八〇〇万円の層は国民全体の三四・七%。それ以下は三五・八%というから、まさしく年収としては中間層である。

しかし、注意しなければならない問題がある。年収を数字で区分するのは容易であるが、その年収によつて生活している方々の生活状態、意識は一枚岩ではない。大都市と地方都市の生活の中身は極めて違う。地方都市での可処分所得は大都市のそれと比べると格段に大きい。大都市に暮らす人はわが国民の半分程度としても、後半分を忘れてはいけない。

個人的な関心の在り様は単純ではない。自分がいくらの年収を稼ぎ出していて、それ

をどのように活用し生活をしているか、今の暮らしを経済的にどのような改善をするべきか、などと経済的設計とフォローをしつつ暮らしている人ばかりではない。漫画的表現をすれば大部分の（とくに男性たる）勤め人にとって経済問題とは小遣い額であつたりする。依然として「家計はかみさんに任したつとんのや」という構図が少なくない。

総理府世論調査によれば、「日々、悩みや不安を抱えて生きている人」が六二・四%（一・八%増）過去最高になつた。こりや大変だというコメントもできるけれど、悩みや不安のない連中が——こんな世の中で——過半数超えているほうがよほど不気味だ。まして「いかにいきるべきか」と真剣に考えれば、悩んで当たり前じやないかね。

で、「生活に満足」していらっしゃる方は六三・七%（二・八%減）、「不満」三四・二%（三・六%増）。あれつ、「悩み・不安」と並べた場合、なんだか違和感がありはせぬか。悩み・不安があつても満足なのだ。つまり現状満足派が多数派を形成している。こんな世の中で！

生き方としては「日々の生活を充実させて楽しむ」は五〇・九%（一・五%減）、「貯蓄・投資をして将来に備える」は三〇・五%（一・七%増）という数字もある。生活が厳しくなつたから、楽しみ派が減つたとも言えるけれど、では、所得の低いほうほど貯

蓄・投資派が多いとも考えられない。楽しみ派と備える派は、それぞれ生き方のタイプだからである。

一九六〇年代初頭くらいまでは、所得階層というものは、かなり国民意識の在り様を形成していた。つまり、大部分の勤め人はあまねく所得が低く、個性的な生活をしようにも、到底適わぬ時代であつた。欲しいモノはたくさんあつた。したいこともたくさんあつた。

たとえば、旅行もしたいけれど、まずテレビ、洗濯機、冷蔵庫を購入しなければならない。旅行すべきか、テレビを買うか、投資効果の持続を考えればテレビにしよう、そして次は洗濯機だつてな具合。

個性は百人百様であるけれど、貧しかつた時代には、個性の前にまず横並び。個性を無視して所得で階層を規定してもよかつたし、野党の政治家が「大衆諸君、われわれわあ」と吼えればよかつた。しかし、今や間違いなく、そんな時代は終つたのだ。

来月は総選挙である。有権者からすれば選挙というものの、鎬を削つての闘いでなくちやあならない。選挙戦に冷めきついて、その後の政局に期待できるわけはない。だから自民党・与党に対して民主党が敢然と挑戦するのは、一人の有権者としておおいに

期待したい。

民主党は反自民を標榜しているのである。そして政権党になりたいと言つのである。その言やよし。

しかしながら、すでに見てきたように、国民を所得階層に分けて中間層向けに、たとえば減税提案をするというのは、いわば利益誘導型、旧来保守政治がやつてきたり」とと共通してはいいか。まして中間層自体の中身にも疑問がある。もつと骨太の「」これが「民主党だ」という政治・経済・社会改革の軸を打ち出してもらいたい。」のままでは自民党加藤派・鳩山グループになつてしまふぞ。

2000.5.1 (月)

大津市長選挙の行方

滋賀県大津市は、「滋賀県の県庁所在地」と言わねばならないくらい、昨今、全国的認知度が低くなっている。ま、認知度が低いかどうかはどうでもいいとも言えるけれど、「それにもなあ」という感じなのだ。

私がはじめて大津市を訪れたのは中学校一年生、ざつと四〇年以前であった。国鉄大津駅を降りて琵琶湖辺の浜大津までのメインストリートは活気があつて、田舎っぺの私は、気分高揚。琵琶湖には「はり丸」という大型観光船が走っていて、四時間くらい遊覧した。「これが湖かいな」と驚いた。

先週の五日～七日、ひさしぶりにJR大津駅頭に立った。驚いた。静謐ではあるのだけれど、活気がない。かのメインストリートは歯が抜けたようにシャツターを下ろしたままの店が少なくない。四〇年前の賑わいはない。

大津市へ出かけたのは長年の朋友・八幡和郎さん（四八歳）がお役人生活を「さらば霞ヶ関」（著作タイトル）して、故郷大津に拠点を構え、政治家への転身を図ろうとし

ていたのだが、この五月二八日投票日の大津市長選挙に出馬したので、及ばずながら応援に出向いたのである。

八幡さんは通産省・国土庁時代、全国を駆け回つて国造り・町造りに尽力してきた。全国的に彼の知名度は高い。大津市長というより、もっと大きなポストに挑戦するのではないかと思っていた人も少なくない。

出馬にはいささかならずイワクあり。現職の山田市長がすでに五選、七七歳と高齢で、四年前の選挙では「もう最後や」と言うていた。そこで市議会緑風会（自民党系）、ネット二二（連合系）の与党二会派が後継候補として八幡さんに立候補を要請。ところが現職が「またやる」と言い出し、総選挙が近いので緑風会もネット二二も、擁立断念。二階に上げて梯子を外すの挙となつた。連合滋賀は一月、新春の集いで「新しいリーダーを求めたい」としていた。三月、緑風会とネット二二も合同記者会見で「八幡擁立」を公表していた。政党のてんやわんや、ご都合主義に多くの市民が苦々しい表情。

元気な八幡さんの元気に俄然火がついた。

そもそも総選挙の都合で市長選挙を振りまわすとは何だ！国と地方の長期債務がすでに六五〇兆円、GDPの一・二倍もの借金。バブル後、大金はたいて景気回復を求めた

が、個人消費はなかなか回復しない。すつきりしない政治情勢、将来に対する不安が強く、個人金融資産一、三〇〇兆円があつても元気が出ない。

要するに暮しの感覚が政治とかけ離れてしまっている。暮しの感覚と政治を結びつけるのはなんと言つても身近な市長選挙でこそ「新しい元気」を提案せにやならぬ。地方分権の時代じやないか。元気な市民も立ちあがつた。

それで四月四日、八幡さんの出馬宣言となつた次第。

八幡さんの方針は明快だ。市長の多選による沈滯。市役所の職員も元気を失つている。陳情型行政ではなく、市民参加・公開型の市政をめざす。オンブズマン制度や、行政評価制度、NPOと支援・協同関係を発展させたいとする。「日本一の都市を作ろう」「大津から日本を変えるぞ」と意氣軒昂。

特に元気な女性に注目、市政の委員会の半分は女性にする。元気な女が輩出すれば男の元気もまた燃える。大規模施設・ハコモノ行政ではなく、ソフトに力を注ぐ。医療・介護・教育・観光を柱とする。全国で町造りに奔走してきた八幡さんならでのアイデアが飛び出しそうだ。

地盤・看板・鞄がない。選挙戦の行方はどうなるか。先回市長選挙では、投票率が三

四%という低率だった。明らかに多選の悪影響が出ている。一人の市長が一〇年は長過ぎる。やむに四年、二四年ともなればチョー長過ぎる。

今は時代の変わり目、八幡陣営ではホームページを開き、空中戦も挑む構え。「変えよう・変わろう・元気になろう」と八幡さんは呼びかけた。この二二日は大津市教育会館で決起集会だ。投票日は今月二八日。

八幡事務所「琵琶湖発・新しい時代をひらく」にアクセスして貰いたい。

URL <http://www.yawata48.com> E-mail info@yawata48.com

選挙応援大歓迎 電話 077-510-6288 & 1008 FAX077-524-9393

週刊R.O通信読者の皆様！大津市在住でなくとも結構です。この通信をあなたのネットワークの方々に配信して貰いませんか。よほしく。

2000.5.8 (月)

No.二八九

市民が意志表示を開始したぞ

週刊R.O.通信を読んでくださるみなさま、日本一の湖・琵琶湖のほとりからの徒手空拳「たつた一人の反乱」、大津市長選挙続報です。選挙と政治の嫌いな方もあるとは存じますが、ちょっと目を通してやってください。

滋賀県でなくても、大津市の有権者でなくても結構ですから、ぜひこの通信をあなたの方々に転送してください。

五日～七日に続いて、一二～一四日、大津市市長選挙に挑戦する「やわた」八幡和郎（四八）さんの応援に行つてきました。告示二一日、投票日二一八日を目前にして、ただいま胸突き八丁、手作り選挙を進める皆さんのがんつきが変わってきた。何に挑戦しているのか、長期政権の現職か、ぎりぎりになつて立候補した共産党か。いやいや、最大の挑戦はわれわれが目指そうとしている理想の地方分権、市民参加の政治だ。

先週後半、共産党候補が出馬表明。これで現職対新人の三人が大津市長選挙を闘うことになった。特徴が明確になつた。既存の政党・組織に依拠する一人対「市民やわた」。